

2017 年度後期 学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 村瀬 鋼

2017 年度後期の授業評価アンケートは、本学部については 483 科目を実施対象科目として 417 科目から回答が得られ、実施率は 86.3%であった（前年度後期は 471 科目中 426 科目から回答を得て、90.4%の実施率）。実施必須科目については 248 科目中 245 科目の実施であった（前年度後期は 239 科目中 238 科目の実施）。実施の規模は、率においては前年度より若干下がったものの、十分な程度を保っていると言って良いだろう。

さて、集計結果についてであるが、全体としては概ね良好な数値を示しており、文芸学部の授業が少なくとも学生に与える印象に関しては大略健全に運営されていることが窺われる。本学部の平均値は、1 から 14 までの全設問において、1 のみを例外として、大学全体の平均値を上回っており、四学部中でも最高値を示している。大学全体の平均値からして、既に、設問 9 と 14 を除いて全て 4 以上の評価という、十分な高水準を維持しているが、それを上回る数値を示している本学部は、学生を満足させる授業展開という点に関して決して恥ずかしくない状態にあると判断される。

前年度後期の結果と比較してみると、すべての項目に関して微細な上下の変動があるが、全体的には、特段の変化はなく、前年度の良好な状態が継続的に維持されていると考えられる。以上、今回のアンケート結果を受けて、学部としては、特段対処すべき問題は認められない。但し、当該の授業時間内に行われる、履修者の側からの評価の調査のみでは、長期的な効果、履修者側での印象を超えた効果をも含む授業の質を、十分に測定しえていたとは言い難いであろう。個々の担当教員は、自由記述をも含むアンケート結果を受けながら、個別的な授業改善の努力を継続することとなろうが、文芸学部としても、変わりゆくであろう状況に対応しつつ、必要な改善に今後とも努める所存である。